



TITLE:

太平天國 (特集 中國近代史の諸問題)

AUTHOR(S):

天野, 元之助

CITATION:

天野, 元之助. 太平天國 (特集 中國近代史の諸問題). 東洋史研究 1954, 13(1-2): 1-28

ISSUE DATE:

1954-04-30

URL:

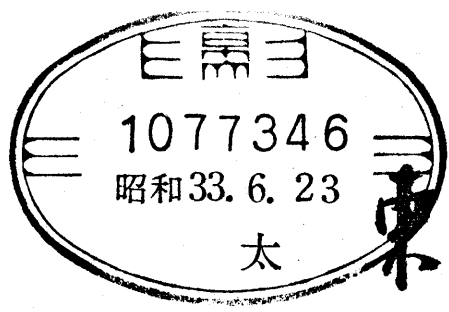
<https://doi.org/10.14989/138999>

RIGHT:

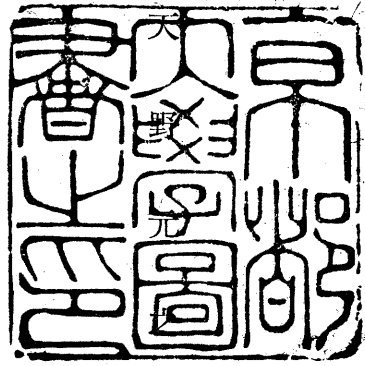
東洋史研究会 寄贈

第十三卷第一・二號合刊號 昭和廿九年三月發行

東洋史研究



太平天國



助

太平天國運動は、アヘン戦争より十一年目の一八五〇年十一月四日（道光三〇年十月初一）の金田起義から、北京條約後六年目の六六年二月九日（同治四年十二月二十四日）の偕王譚體元等擒殺まで約十六年間、英國を首班とする資本主義勢力の外壓を通じて、清廷威信の失墜（官場・軍隊の腐敗と秕政）と社會人心の不安のさなか、十七省の廣大な地域に跨がり、六百有餘の城市を陥れ、その間南京に太平天國政府を樹立し、長江流域地方を支配したところの洪秀全を中心とした革命戦争である。

1 洪秀全（仁坤）は、一八一三年（嘉慶十七年十二月初十）廣東省花縣の客家である洪氏一族中（「國滅びるに及び、全族の」の父老の家に生れ、あまり裕かではなかったが（それでも耕牛一、二頭を有したという）、二人の異母兄が農事に従事したのとは異なり、幼時より讀書を好み、十三歳（一八二五年）で經史詩文に通じ、「陞官」をめざして度々廣州の府試に應じたが、

三六年(二四歳)二度目の應試のとき、路上で The London Missionary Society (倫敦宣教會) に屬する梁阿發(學善、廣東高明の人)から、その編著『初學使用勸世良言』(“Good Words Exhorting the Age”) 九篇(一八三二年刊)の小冊子を贈られた。尤もその節は、注意もせず持ち歸つて書櫃中にしまつておいた。その翌春ふたたび廣州で應試し、連年の落第に對する失意と科場腐敗に對する忿懣のうちに、病をえて歸郷し、四十餘日におよぶ大患の間、「滿口金鬚・黑龍袍」の一老翁より、天下の人はわが生み育てたものなるに拘らず、われを蔑にして、妖魔を信ず。よつて汝はこれらの妖魔を退治せよとて、一ふりの劍と妖魔を懲服しうる印綬を與えられたとの幻想、また彼が長兄と呼んだ中年の人から爲すべきことを教えられ、妖魔退治に伴なわれ、その助力を得たとの幻想を経験し、その病が回瘳するや、彼の性格と外貌が變つてしまつたという。たまたま四三年夏、彼のいとこの李敬芳から注意されて、『勸世良言』を繙くや、六年前にみた病中の幻覺と驚くほど符合するのを發見し、この新舊聖書の拔萃と釋義・說教(プロテスタント・ミッショナリーの)からなる九篇の書を熱心に學びとつて、ここに自己を救世主耶穌の弟として、同じく天父(爺火華・上帝)の第二子として、世界(こゝでは中國)の立て直しの爲に遣されたものと狂信し、天父の前に悔い改め、邪神を信奉せず、惡しきを行わず、天條を遵守すべき上帝信仰を説き、同窓の書友馮雲山(同郷の客家・中農の出身・私塾の教師)・族弟洪仁玕を歸依させ(洗禮を授く)、さらに無遠慮に中國式に改竄した基督教(多分に民間宗教的要素を含むところの)を宣傳し、

彼の説いた宗教については、安部健夫教授が『最新世界史』(昭和二八年刊)で「キリスト教と道教的な土俗の信仰様式とをつきあわせたものであった。しかもそのキリスト教は、新約『聖書』的・ローマ的(愛の宗教)などというよりは、むしろ舊約的・ユダヤ的(復讐の宗教)なものであった」とせられ、また J. K. Fairbank 博士の “The United States and China,” 1948 p. E. P. Boardman 氏の研究をかりて、洪は創造主としての神の概念を、舊約ヘブライのそれから採り、天父の概念を用いたが、『新約聖書』には従っていない。天國と地獄の記述とともに、報いと罰とを、『新約聖書』から借りたが、基督教獨特の教である隣人に對する愛と赦し、謙讓と心やりといったものに關する精神力を脱がしてしまつた。これが、所謂かれの基督教的なものであり、それと共に、K. S. Latourette 氏が “A History of Christian Missions in China,” 1932 (p. 265) で云うように、多分に舊い中國人の慣習と信仰 (practices and beliefs) を含んでいるのである。

そして其の塾中^{じゆく}に祀れる至聖孔子の牌位を棄てるという當時としては破天荒の舉に出たので、書館^{じゆく}の教師たる職を失い、ここに馮雲山とともに、四四年四月『使徒行傳』第十九章にみえるパウロの傳道旅行に擬して、廣西省黔・鬱兩江流域千[支]里の間の「客家」村落に出入し、桂平縣北境の紫荆山區を根據として、「上帝會」の組織活動を進めた。

この間、洪は四七年三月洪仁玕と共に、廣州の The American Baptist Board (美國洗禮會) 教士 Rev. Issacher J. Roberts (羅孝全) を訪れ、彼のみ約二カ月寄寓して、新・舊聖書を研究し、のち二度目の廣西入りをし、馮と會つて布教に従事している。

一体この山區の客家村落は、數こそ多いが、小さく且つ貧しく、村民は山地を開荒し、柴刈・炭焼その他の仕事に従う客籍の民(廣東省嘉應州一帶から來た移民)であり、言語(客家はよく原來の中原口音をよくし代々相傳う)・習俗を異にする「本地」人(本籍人: natives)からは、たえず蔑視の眼でみられた。そのため兩者の反目は甚だしく、屢々械鬥すら惹起し、地方の吏僚は又この機會にしたたかの賄賂をとつて調停し、客家人の憤懣と結束とをたかめつつあった。たまたま客家である洪・馮の説く上帝一視同仁の教義と未來の福音^(大亂のおこるを豫言し、上帝を拜する者は、災を免れ天福を享くと説く)は、かれら客家の人々の意に投じ、間もなく二千の會衆を獲得し、而も日毎にその數を増した。且つ折柄の兩廣の凶作(四七—四八年)で飢民の流離、さらに賊盜の擾亂——それは強大となつて公然と大小部落から墟市^{いちち}をさへ襲撃しはじめたと云う——に對處して、本地人は團練を組織するに至り、上帝會また之に對抗するため、「保良攻匪會」を結成し、官兵に逐われた盜匪・家を喪つた流民などをも收容し、練兵・籌餉して、自衛の陣を張つたのである。即ちその中には、楊秀清^(炭燒工、のち結夥して洋貨を護送した、また失業して炭を燒く、客家)・蕭朝貴^(農民、のち結夥して商旅を護送す)・韋昌輝^(質庫兼地主、喜んで客家と交りをつくる)・石達開^(豪紳、客家)・秦日綱^(傭作、礦工ともなり、郷男となる)・胡以晄^(豪紳、武秀才、客と結ぶを喜ぶ)・黃玉琨^(訟師)・林鳳祥^(流氓)・盧賢拔^(儒生)・何震川^(儒生)・吳可憶^(質庫)・周勝坤^(質庫)・羅大綱^(海盜魁、槍械を供給す)・李開芳^(流氓)・吳如孝^(煙土販運)・羅必芳^(煙土販運)・賓福壽^(木工)等々各種社會層のメンバーがみられたが、會衆の大半は「農夫之家、寒苦之家」のものであった。

(一) 賊盜の擾亂については、一八五〇年(道光三十年)鴻臚寺卿呂賢基の上奏文に、廣西匪徒蹂躪の區は、已に十分の七に近しと見えてゐるが、かかる匪盜増大の原因としては、三九年から四二年におよぶアヘン戦争の終結後、復員軍人の匪賊化、さらに四一年五月

「平英國」の反英闘争以後引つづく廣州における排英運動よりして外國貿易に依存した運輸業者、アヘンの密輸・販賣業者の失業による匪徒化、さらに英國海軍の海盜掃蕩(1847, 49, 50-56)⁹⁾による退避などが、折柄の凶作・物價騰貴に破産せしめられた窮乏の民を抱合して、廣西省という首都北京から二千哩以上も離れた僻地の地方におこり、清國軍隊といへば、廣州にある滿洲八旗の守備隊を除いて、兩廣二省には約九萬の綠營が一四二のキャンプに一種の警官隊として散在し、而もただ紙上において存在するものもある状態¹⁰⁾で、且つその軍隊の中に瀰漫したアヘンの吸飲による腐化で以て、全く匪徒鎮壓の用をなさなかったのである。即ち此の匪賊の集のようになつていた廣西の一隅から、上帝會・のちの太平天國の叛亂が発生したのである。

註

- ① 簡又文『太平天國、廣西首義史』廣西省政府編譯處主編 民國三五年上海初版
- ② (Rev. Theodore Hamberg, "The Visions of Hung-Siu-Tshuen, and the Origin of the Kwang-si Insurrection," Hongkong, 1854. 洪仁玕述、韓山文著、簡又文譯『太平天國起義記』民國二十四年燕京大學圖書館印。青木富太郎譯『洪秀全の幻想』昭和十六年刊)
- ③ 洪仁玕「太平天日」『太平天國史料』北京大學文科研究所・北京圖書館編輯 一九五〇年刊
- ④ 凌善清編『太平天國野史』民國十五年三版
- ⑤ 羅爾綱『太平天國史稿』一九五一年刊
- ⑥ 羅爾綱『忠王李秀成自傳原稿箋證』一九五一年刊
- ⑦ 郭廷以『太平天國史事日誌』上・下 民國三十六年刊
- ⑧ H. B. Morse and H. F. Mac Nair, "Far Eastern International Relations," 1931. 喜入虎太郎・淺野晃共譯『極東國際關係史』上卷 昭和十六年刊
- ⑨ 波多野善大「太平天國に關する二、三の問題について」『歷史學研究』一五〇號 一九五二年三月刊
- ⑩ J. K. Fairbank, "The United States and China," Harvard University Press, 1951. Chap. The Revolutionary Process.

二

さて四七年十月、洪・馮らの會衆が象州甘王廟を打ちこわすといった彼らの廟宇・偶像破壊の舉に出でるや、地方郷紳の忌諱にふれ、

ここに馮雲山が逮捕せられ、洪秀全は嘆願書を提出するため廣州へ出立、暫くして釋放された馮は、また其のあとを追ひ、ともに

故郷に歸つたため（四八—四九年）¹⁾、その間に楊秀清・蕭朝貴が夫々「天父下凡」・「天兄下凡」に托して、會衆の動搖を抑え、代つて教導權を握つたのであり、洪・馮の歸來後も、楊・蕭の勢力地盤が著しく昂まつてしまつた。

さらに五〇年九月潯州府副將李殿元・桂平知縣倪濤は、金田の上帝會員が神偶を毀滅し、盜匪を藏匿し、不軌を謀るものとして、兵を率いてその徒を捕えんとしたに對し、韋昌輝らが會衆をあつめて之を拒み、巡檢張を殺すにいたつた事件が発生、十一月四日（舊十月初二）潯州平南の官軍によつて、洪・馮が縣北の鵬化山の胡以晄の邸で遠まきに圍まれるや、桂平金田村の韋の邸で楊秀清・蕭朝貴・石達開・秦日綱らが謀議して、會衆徒黨を聚めて官軍を擊破し、救出に成功し、翌年一月十一日（舊十二月初十）洪秀全三十八才の生日を卜して、金田村の韋氏大宗祠において、會衆が高く革命の大旗をたて、上帝禮拜の儀式を営み、檄を發して起義、即ち反清革命勢力として立ちあがつたのである。

「その地は、周圍五十餘〔支〕里、萬山環抱し、羊腸曲折、僅かに一徑を通ず」といつた要害の地であり、

會衆たちは「學室從之」、あるいは「桮（毀）其室（家）」「挈全家以從」、富者は「罄其家、助軍餉」もので、彼らはその家財を處分して、之を聖庫に納め、その家を毀して「顧念を絶ち」、全家（老幼男女）一族郎黨を擧げて之に投じ、清軍の攻撃を防いだが、ついに同年九月二十五日、一、三千の兵衆（客家農民・炭燒工・礦工を主体としたもの）を以て、永安州城（今の蒙山縣）を占領、十二月十七日（舊十月二十五日）洪は「牛・馬各一頭を殺して天父を祭り、繡龍黃旗一桿をつくり」上帝會の儀禮を執行、ここに國號を「太平天國」と定め、

太平天國の名は、その革命運動の目標と理想を標示したもので、洪秀全の『原道醒世訓』にみえる運動の目標「天下一家、共享太平」と、『新遺詔聖書』馬太傳第四章の信仰の理想「天國是總天上下地而言。天上有天國、地下有天國。天上地下、同是神父天國。今日天父・天兄下凡、創開天國」を表現したものである。

その起義軍を太平軍と命名、また正朔を改め、この年（咸豐元年一八五一年）を以て太平天國元年とし、洪秀全自ら天王と號し、妻賴氏を后（娘々）とし、論功封爵をおこなつて、楊秀清を東王に、蕭朝貴を西王に、馮雲山を南王に、韋昌輝を北王に、石達開を翼王に、洪大全を天德王に封じ、秦日綱ら四十八人を丞相・軍帥等の要職に任じた。すなわち四カ月の

死守のち糧食つき、五二年四月雨に乗じて太平軍一萬（總數約三萬）が圍みを脱し、省城桂林に逼ったが、五月その圍みを解いて湖南へ進發、九月その前衛軍は長沙に進出してゐた。因みに全軍の總指揮は、東王楊があたつたのである。

而してこの太平軍の進んだ道は、相呼應する會黨（三合會）の嚮導によつたもので、「道州を攻む。會黨之に應ず」。「郴州を攻む。會黨之に應ず」。「郴州より長沙に向う。會黨、嚮導をなす」と傳えられ、「順天行道」、「滅清復明」のスローガンこそものが、具體的な實行方法や統一的な組織を有せぬこれら會黨は、進軍する太平軍に響應するばかりか、それに參加し、上帝會の教化・訓練を受け、その領導と紀律に服従していったのである。

（一）三合會の會衆は、北斗七星を拜し、三十六誓をとなし、刺血して義兄弟となり、かくして結ばれた洪家兄弟は、「同心協力して、共に明主を扶け『清を討つて江山を復し、以て正位を承けしめんとする』（三合會の「請神祝文」）反清復明の秘密結社であり、一六七四年（康熙十三年七月二五日）福建省龍巖縣（莆田）の少林寺からおこつて、華中南より南洋に擴がり、五祖（五房）に因んで、長房福建・二房廣東・三房雲南・四房湖廣・五房浙江の五大會所が中心となり、亡國の志士の組織から次第に擴大して、低い軍・官吏、さらに商人・船戶・運輸工人、また江湖の流亡者の間に、多數の洪門兄弟を獲得してゐた。而もこの會黨が太平天國起義前から屢々華・中南の各地で叛亂を惹起して居る（『太平天國史事日誌』上冊一八〇二、一七、二二、三一、三二、三七、四一、四三、四四、四五、四七、四八、四九、五〇年をみよ）。T. Hambergの著には、太平軍擧兵のはじめ、羅大綱ら八名の三合會大哥の歸投に際し、眞神の崇拜を誓わせて、之を許すとともに、上帝會より教師を派遣したことを述べ、更に又洪秀全の三合會の滅清復明の綱領ならびに其の儀禮に對する批判を載せている。

さて金田起義より永安占領當時の太平軍は、廣西の「老兄弟」約一萬、婦女子を合わせて約三萬、男は「短衣・赤足」女は纏足せず、「双足、漆の如く、多く鞋・襪をはかず、裙をつけぬ」農民軍ではあつたが、「烏合の衆」ではなく、

廣西巡撫周天爵の書に、「賊（太平軍）愈戰愈多、而我兵（清軍）則愈怯、實無法可以剿滅之。賊兇悍有力、非烏合之衆、彼方紀律嚴明、而我軍則毫無紀律」とみゆ。

『太平軍目』（起義のとき成立したという⁸⁾）によつて、其の編成と旗號とが定められ、その部隊は、「軍」を以て單位とし、一軍帥は前・後・左・右・中營の五つの師帥（兵員合計二三、一二五人）を管轄し、一師帥は前・後・左・右・中の五つの

旅帥（二、六二五人）を管し、一旅帥は壹・貳・參・肆・伍の五卒長（五二五人）を管し、一卒長は東・西・南・北の四つの兩司馬（一〇四人）を管し、一兩司馬は剛強・勇敢・雄猛・果毅・威武の五つの伍長（二五人）を管し、一伍長は衝鋒・破敵・制勝・奏捷の四人の伍卒（聖兵）を管するといった編成法が採用せられ、この戦闘部隊のほかに、諸匠營・女館・牌尾館等特有の組織を設けた。即ち諸匠營とは、水營（武漢占領時、唐正財によって設置せらる）・土營・木營・金匠營の如き特殊部隊であり、例えば土營は廣西の炭礦夫を以て編成せられ（開墾工兄弟とよばれた）、地道の掘鑿・城寨の修理を擔當し（長沙・武昌・南京・南昌等で、屢々成果を擧ぐ、専ら全軍の使用に供し、作戰上至大の役割を果たし、清國側の記録にも、これら諸匠營は、「各備其材、各利其器、凡有所需、無不如意」としている。また婦女たちの中には、洪宣嬌（洪秀全の）・蕭三娘（蕭朝貴の妹？）・楊二姑（楊輔清の妹）・韓寶英（石達開の義女）の如き「女軍」を揮いて直接戦闘に参加する者もあったが、それ以外はすべて女館（女營）に編入せられ、「女紅を善くする者は、繡錦營に分入し、……」餘は悉く「荷磚・開溝・濬壕・運土の諸役に任じた」のである。また軍中の老幼（五十一歳以上及び十四歳以下）は「牌尾」と稱し、老人には夜番・竹簽削りや炊事などにあたらせ、子供は童子兵とし、戦闘部隊を幫助し、また監察の具に利用した。

「太平軍臨陣攻城、亦常用童子軍臨前敵……又陷城時、入官解搜刮金銀・文書・服飾……其焚燒廟宇、毀壞神像諸事、童子又最爲樂爲……搜查洋烟・黃烟、及邏察犯天條・犯令各事、童子亦最認真。」それ故「太平軍視童子爲至寶。」

而してかれらは、剃頭辮髪を清制として廢し、鬚髪を蓄えて薙せず、ただ以前の辮子を結んで頂にまきつけ、外を紅巾でつつんだのである。

即ち以上の如き組織とともに、嚴勵な軍律が實施された。『定營規條十要』・『行營規矩』（十條）は、金田起義の頃すでに出来たといわれるが、前者には「（一要）恪遵天令」・「（三要）不得吹烟・飲酒」・「（四要）同心合力、各遵有司約束、不得隱藏兵數及匿金銀器飾」・「（五要）別男營・女營、不得授受相親」・「（十要）不許謊言……訛傳軍機」などの軍律が見られ、後者には「（五令）軍兵男婦、不得入鄉造飯取食、毀壞民房、擄掠財物」など地方民に對する舉措を規定するもの

數條が含まれている。

この男女の嚴しい禁慾主義は、「金陵（南京）に至り天堂に登ることになれば、夫婦の團聚を許す」と約束されたもので、南京奠都のち（五五年三月）、令を下して、男女の配偶（團聚婚配）を許し、ここに女館は消滅した。²⁾

而も凡そ天條・軍律に違う者は、その罪の輕重大小に按じて、(一)死刑・斬首・點天燈・五馬分屍、(二)枷號示衆、(三)杖笞（五板―二十板）、(四)降級の四種の刑罰を以てした。

『太平天國野史』卷之七刑法のうちに、『禁律』五十九條を載せているが、そのうち「點天燈」（火あぶり）の罪に處するもの四條、『五馬分屍』一條、『斬』・「斬首不留」に處するもの大半を占む。また沈懋良の『江南春夢庵筆記』⁹⁾には、『僞律一百七十五條、天燈三、五馬分屍三、斬四十一、杖五十二、鞭七十八』とし、刑の仕方については、張汝南の『金陵省難紀略』⁹⁾の賊刑の條に詳し。而もそれらが實施されたことは、――尤も全期間に亘って勵行されたかは保し難いが――太平軍が湖南へ進撃の途、蕭朝貴の父が私かにその妻を招いて同宿したかどで、父母を斬首したこと（禁律中に「一凡犯第七天條（不好奸邪淫亂）、如係老兄弟、定點天燈、斬兄弟斬首示衆。」）一凡夫妻私犯天條者、男女皆斬」とみゆ）、孟文建がアヘンを嗜んで檢擧されたこと、洪仁達がアヘンを嗜んだかどで、肉袒面縛、壇下に置いて罪を請わしめたこと（禁律に「一凡吹洋煙者、斬首不留」とみゆ）、傅善祥が黃煙を吸つて枷せられたこと（禁律に「一凡吃黃煙者、初犯責打一百、枷一個禮拜。再犯責打一千、枷三個禮拜。三犯斬首不留」とみゆ）、李秀成が軍中で經史を讀んで禁律に觸れ、刑死されんとしたこと（禁律に「一凡一切妖書、如有敢念誦教習者、一概皆斬」とみゆ）などが、『太平天國野史』の列傳中ののっている。また「金陵の李姓の女が小刀を髮内に藏し、楊逆の左肩を刺傷したので、皮を剥ぎ、高竿に懸けて焚燒した」點天燈の處刑をうたつた吳家楨の詩（「金陵紀事雜詠」）が、『盾鼻隨聞錄』卷八獨秀峯題壁、無名氏の中に錄され、また『武昌紀事』⁹⁾には、「女館に闖入して姦を行わんとした」兵數人を、賊目が漢陽門外に曝し首にしたことが見える。

而して軍隊内部では、すべての者に『天條』を熟識せしめ（もし三週間を過ぎるも熟記せぬ）、朝夕誦讀させたものであり、この『十款天條』は、皇上帝（爺火華）を崇拜して（\$1）、それ以外の神々をすべて邪神として拜するを許さず（\$2）、みだりに皇上帝の名を題せず（\$3）、七日（安息日）毎に（但し土曜日にあたる）禮拜すること（\$4）、また父母に對し孝順（\$5）、人の殺害を許さず（\$6）、奸邪・淫亂（\$7）、偷竊・劫搶（\$8）、講謊話（\$9）、起貪心をゆるさざること（\$10）を示し、これに遵えば、永く天

福を享けることを教え、そして戦没した兵士は、「昇天して天父に随って、大天堂に到り、萬年の福を享ける」ものと確信せしめた。⁴⁾ 且つ太平軍の東王楊・西王蕭の「天父下凡」・「天兄下凡」に托される言葉、即ち彼らがシャーマン的な行動によって自己の意志を神のそれとして權威づけたおかげは、全軍を鼓舞し、歡喜せしめたものであらう。

洪仁玕の自述に、「東王は上帝の降托を蒙り、よく過去・後來を知り、人をして充分欽服せしめ、かつ東王はよく人に代って病を贖う。……いつも何か云えば、すぐ驗應があつた。西王は天兄の降托を蒙り、よく大勝利をえた。故に當時戦に勝つたのは、皆西王が降托を蒙つた力である」と。¹⁰⁾

また軍中で事ある毎に、士卒に對して「講道理」をやつて、勸諭（政治教育）したものである。

「凡刑人、必講道理。擄人、必講道理。倉卒行軍、臨時授令、必講道理。……驅使羣賊、爲極苦至難之役、必講道理。逃者日多、必講道理。……逼人貢獻、必講道理。」

即ちかくの如き組織と軍律と訓練とを以て、その裝備においては誠に清軍とは格段の差はあれ、

金田起義の始め、桂平の白沙で「開爐鑄炮」した¹¹⁾こと、また道州で「銅鐵各物を搜取して大小砲位三百餘尊を製造し」た³⁾ことが見えてゐる。即ち武器としては、刀・矛のほか、舊式の鳥鎗・火礮がつかわれ、また地雷火を攻城に用うる法も識つていたが、とにかく當初は貧弱な武裝であつた。しかし天京に奠都してからは、上海の外人武器商人から新式洋鎗を購入し、それが年一年と増大し、忠王李秀成部隊は「洋鎗最多」とせられ、また歸王鄧光明は洋礮隊五千を揮ひ、「其洋礮精悍爲諸賊之冠」といわれた。（『朋僚函稿』卷二・卷三）

破竹の勢を以て進撃し、各地で「新兄弟」をその隊伍に收容し、よく字を書く者は先生に、軀幹壯偉の者は牌刀手に、五十歳以上の者は汲鑿・支吏^{よはん}にし、とりわけ榔・桂の挖煤開礦人、沿江の綽夫、船戶、碼頭の挑脚、轎夫、鐵木匠作などに對しては、必ず善く之を遇したといわれ、⁴⁾ 廣西老兄弟は新兄弟に對し「銀錢を分給し、あたえるに食を以てし、掠めた衣飾・被褥^{ふとん}も之を均分し、嬉笑諧謔、膝をまちえて心を談じ（促膝談心）、恰も一家の如き」⁴⁾ 有様で、その軍事勢力を強めつつ、進撃したのである。

いま太平軍「前十三軍前營前一東兩司馬統下の「兵冊」⁴⁾をみると、正司馬の吉は二十六歳、金田で入營した廣西老兄弟の一人であ

り、副司馬の汪は十八歳、武昌で入營した湖北人、夫々武昌あるいは天京の戦で功をたてた人物であり、この兵冊にみえる三十名の籍貫は、湖北が最も多く十二人、ついで安徽の七人、江南の五人、廣西・廣東・湖南・江西・河南・陝西いづれも一人づつであり、而も入營した地は實に二十カ所に互つてゐる。されば後年寧波を攻略した太平軍李世賢部隊は、「四十もの異つた方言をしゃべつてゐる」と報ぜられた。¹³⁾

而してこれらの採つた戰術については、『賊情彙纂』卷四偽軍制上（陣法以下）や『太平天國野史』卷之三兵制（陣法・營壘）に、牽線陣・螃蟹陣・百鳥陣・伏地陣（一名臥虎陣）や營壘の法を記録しているが、私は六一年十二月侍王李世賢部隊が浙江寧波攻略戰に關する寧波英國領事 F. Harvey [夏福禮] の駐華公使 F. Bruce [卜魯斯] へ宛てた書信を傳えておく。曰く、「恐怖をふきこむ。——これが太平軍の戰術のすべてである。……威嚇の手段は、次ぎの如し。何よりも先ず、にわかの大群をなして、或るきまつた地點に出現する。最初に秘かに地盤をさぐり、不穩な噂をたて、あちこちに放火する爲に、密偵がおくり込まれる。威嚇の最大の手段は、太平軍の道化じみた雑色の制服である。……この道化じみた衣裳は、戰鬪に際して腔綫砲よりも大きな優越性を太平軍に與えている。これらのすべてに、更に長いもじゃ／＼した黒い。又は黒く染めた髪の毛、狂氣じみた其の目つき、その陰鬱な長い吼聲、激怒と狂暴のよそおいを附け加えてみるがよい。そうすれば、小事にこだわる・柔和な・幾何學的に釣合のとれた中國人の一般住民を、死ぬほど驚かすに必要なものは、すべて備わつたことになる。恐慌をまき散らす密偵につづいて、わざと追われて來た農村からの避難民が現れる。彼らは接近してくる太平軍の兵力・威力・兇猛さを誇張して描き出すのである。市内に火災が起り、そして都市の守備隊が、此の恐ろしい光景の印象を受け乍ら、戰鬪に出てゆくとき、恐怖を呼び起しつゝ雑色の怪物の姿が、ばらばらと遠くの方から現れる。その出現は、磁力のような作用を及ぼすのである。適當な時期に、刀槍や獵銃で武装した幾十萬の太平軍が、恐怖のために半死の状態になつた敵に向つて荒々しく突進する」と。¹³⁾

私は、以上太平軍の組織・軍律・政治教育・戰術に觸れて來たが、ここで増井經夫教授のすぐれた論著『太平天國』（昭和二六年刊）に誌された文章を引用することを許されたい。氏はいう、「地主へ反抗する暴動から、反官僚の民亂となり、滿洲朝廷打倒の獨

立國へ發展して、外國資本との對決まで、この路を歩んだ太平天國が、最後の段階でみせた態度は、北京政府にはみられない毅然たるものだった。……彼らの自信は、傳統や習熟から來たものでなく、その包含している各層から信頼されているという自覺の強さからではなかったかと思われる。……直接關係者の信頼と間接周邊者の同情との大いさこそ、彼らの國際外交に稀にみる獨立的氣宇を與えた支柱であつたろう。「この點、後段に述べる對外關係と關連をもつ「天野」。……彼らの戒律のさびしさも、普通には指導者たちの狂信的熱情の所以に歸せられている。……この戒律の昂奮は、信頼されているものの自覺に他ならない。……太平天國のもつ宗教は、この信頼のシンボルだった。だからこれにこたえるものは、戒律の維持であつた。そしてこれが首腦部の自信を固める原動力だったし、また大衆の信頼をつなぐ絆でもあつた。彼らの行進が威風をもち、爆發的な擴大を思わせる原因も、こんなところにあつたにちがいない」と。

註

- ① 韓山文『太平天國起義記』
- ② 郭廷以『太平天國史事日誌』上册
- ③ 楊園退叟(汪堃)「盾鼻隨聞錄」卷一粵寇紀略、卷二楚寇紀略『太平天國Ⅳ』
- ④ 凌善清編『太平天國野史』
- ⑤ 張德堅編『賊情彙纂』咸豐五年、『太平天國Ⅰ』一九五二年刊
- ⑥ 華崗『太平天國革命戰爭史』一九五一年刊
- ⑦ 鳥山喜一「太平天國亂の本質」『東方文化史叢考』京城帝國大學會編 昭和十年刊
- ⑧ 『太平軍目』・『太平條規』(うちに定營規條十要・行營規條の二文あり)・『天條書』とともに『太平天國Ⅰ』に轉む
- ⑨ 中國史學會主編『太平天國Ⅳ』
- ⑩ 「洪仁玕自述」『太平天國Ⅱ』一九五二年刊
- ⑪ 簡又文『太平軍廣西首義史』
- ⑫ 羅爾綱「坊傳本李秀成供十要十誤辨偽」『太平天國史辨偽集』一九五一年再版
- ⑬ マルクス「中國問題」『ブレッセ』一八六二年七月七日、『マルクス・エンゲルス選集』第八卷上 中國・インドおよび植民地問題 一九四九年刊

三

さらに湖南への北上の途、東王楊・西王蕭の名で「奉天討胡檄布四方諭」・「奉天誅妖救世安民諭」・「救一切天生天養諭」なる注目すべき檄文を發している。即ち最初の諭は、文中「公等」・「四方英俊」とあつて、専ら讀書人に對してよび

かけたもので、中國が胡虜（滿人）に盜據せられてゐること、滿人が犯した十大罪狀を指摘して、民族主義を強調し、這次の義兵が奉天救民の目的に出づることをうったえたもの、第二は團勇壯丁（その多くが三合會黨であるとす）に對し、上帝會の教義を敷陳し、三合會黨の反清響應を勧めたもの、第三は一般大衆に對して、上帝信仰を説き、「速かに魔鬼をすてて親爺に歸り、天の百祿を受くべきこと」をさとしたものである。即ちここには、世人の世俗の宗教迷信を排して上帝崇拜の新宗教に歸依し、同時に滿人支配を仆して、上帝の恩徳ある太平天國を建設せんとする宗教・民族・政治合一の理想を表明したものと見られる。併し太平軍は、かくの如く讀書人に訴え乍らも、當時の安定勢力たる彼らを敵にまわす如き行動―孔廟（學宮）の毀壞・經典の廢棄・財産の沒收を行い、また長年の信仰對象たる寺廟の偶像をすべて「死妖」として打ちこわし、之と妥協せなかつたところに、一般の守舊的習慣とあわず、更に彼らの信する上帝・耶穌の外國神は、アヘン戦争の誘發・中國侵略と結びつく中國人の反感を激發して、この運動における一つの限界があつた。

さて太平軍は、湖南への進軍中、永安脱出時天德王洪大全（彼については、その存在を認めぬ學者もあるが）を、蓑衣渡で南王馮雲山を、長沙攻略で西王蕭朝貴を失いつつも、五年十二月益陽・岳州で民船や銃砲・武器を大量鹵獲して、翌五年一月十二日武漢を占領、「官兵不留、百姓不傷」の東王楊の軍令で以て、官兵の大殺戮が行われた。そして此處に止まること約一カ月、男女五十餘萬が武漢三鎮を捨てて、水陸より長江を下り、所在で兵力を増強しつつ、三月十九日南京を陥れ、守城の官旗人二萬餘を屠殺して江面に投じた。その月の末、天王府を兩江總督衙門におき、南京（金陵）を改めて天京と名づけ、ここに都を定めたのである。

かくして此の年の末には、太平軍に置籍したものの男子五、六十萬、女子五十萬以上にのぼつたと稱せらる。⁵⁾

ところで、金田起義より天京設置までの二年有半、太平軍はその進軍とともに追撃される状態で、廣西提督向榮（五三年一月欽差大臣に任命せらる）の軍は、その跡を追って十日間を隔てて南京城東の沙子岡（その後、孝陵衛に移る）に屯し（所謂江南大營、兵力約萬餘）、また欽差大臣琦善の軍は、北方の河南から來たつて揚州城外に屯し（所謂江北大營、一萬七、八千）、

天京を包圍する態勢をとった。尤も腐化した清兵の脅威は、太平軍にとって軍事的には、さしてこたえはしなかったが、經濟面での影響は無視しがたく、天京の糧食補給に障礙を來たしたことは事實である。

右はさておき、太平天國は南京奠都とともに、愈々領土建設(?)の段階に入り、三月末より四月初にかけて、下流の鎮江・揚州を占領、北方への糧道としての大運河への兩つの口を扼し、

而もこのとき更に鎮・揚の線から江南の地に東進しなかつた理由については、「太平天國は禁烟問題を考慮して、外國との衝突を惹起すことを願わず、消極的政策を採り、江・浙に向つての軍事行動を停止した」とも云われる。すなわち此の年の九月天地會(三合會)系の小刀會劉麗川(廣東の砂糖商人)が、廣東・福建人の會黨らと共に紅布で頭を裹み、衆數千人が暴動をおこして、上海縣城を占領し、一年五カ月に亘つて之を確保し、その間彼らは馮雲山の幼兒を尋ね出し、五百銀子を出して一匹の好い馬を買つて、彼を騎乗させ、城内を游行して、太平天國に對する忠誠を表示し、代表を天京に送つてその支援を乞うたのである。それにも拘らず、彼らとの合作を拒絶して、ここに重大なチャンスを失してしまつた。その拒絶の原因が、「同じ宗教的教義を奉ぜず、アヘンの吸飲を許してゐたから」、即ち「不道德な習慣と惡癖 (their immoral habits and vicious propensities)」のためか、或いはそのほか、彼らが偶像破壞を敢えてせなかつたためか、私は之を確認する資料をもたないが、之を機會に、江南デルタの富庶地域や外國に對し開かれた港を、その支配圈におさめることを敢えてせず、後述の如く長江中流地域を占據して、その兵站を確保せんとし、而もその危機的段階に入つて、はじめて江浙地方に進攻したのであつて、その間長く當時の開港場上海・寧波・福州・廈門・廣東の要所は、終始その敵たる清國當局によつて、大小の兵站部となり、軍事資材の供給地として委すという戰略上の失敗をしてゐるのである。今日の史家は、太平天國の「宗派主義」・思想の狹隘性にメスを入れて來た。例えば市古宙三教授は、「太平天國詔書の改正について」『東洋學報』三三(二) (昭和五年十二月)で、一八五三年の頒行詔書「改正の意圖は、經傳的色彩をなくすること、三合會との關係を絶つことにあつたらう」とし、榮孟源氏も亦、「天地會領袖洪大全」『太平天國革命運動論文集』(一九五〇年十一月刊)で、太平天國が都を南京に定めて後、宗派思想が引つづいて發展し、ついに公然と天地會を排斥し、檄文中天地會に號召した詞句を取消し、天地會との合作を拒絶し、以て上海の劉麗川、廈門の黃威、廣東の陳開・李雲茂、湖南の邱倡道や各地の天地會の起義軍を、先後して滿清政府に各個擊破されることをしてしまつた」としてゐる。

また同年六月十日上流の安慶を再占領し、さらに北伐軍(李開芳・林鳳祥・吉文元部五萬)を出して、前後三年江蘇・安徽・河南・山西・直隸・山東の六省一萬數千哩にわたつて縱横に前進し、その間北方の捻軍と連合し(羅爾綱『太平天國史稿』

卷三捻軍抗清表参照)、清都北京を震駭して戒嚴令をしかしめたが、後出の援軍(黃生才・陳世保部)と共にいずれも全滅の憂き目に遭った(五五年五月)。併し之によって多數の清軍を華北に釘づけして、長江流域の回復に貢献すると共に、北伐軍の殘黨は捻軍に投じてその勢力を強化し、黃河流域で活潑な活動を展開し、太平軍の全滅後も容易に屈せず、六八年まで反抗をつづけたのである。

一方、安慶より更に長江上流を爭取せんとて、江西・湖北・湖南へ進撃し(胡以晄・羅大綱部)、武漢・九江・安慶の三大據點を確保し、上は岳州・武漢より下は鎮江・揚州にいたる長江兩岸各々五十乃至一百哩の地域、及び洞庭・鄱陽の二大湖の沿岸地域を、誠に不安定なものだったが、一應支配するに至った。尤も武漢三鎮のときは、たえず爭奪のまとなり、その勢力の消長はあったが、「新下の州縣では、民衆はすべて争つて糧冊を献じ、錢・米を輸し、風を聞いて歸附し、清軍到らば罷市して以て拒ぎ、人心大いに定まる」といわれた⁹⁾。

而もこの間、羅爾綱氏の『太平天國史稿』卷四會黨起義表下によれば、會黨の蜂起は十六省におよび、モース・マクネア兩氏も亦、「この數年間、事實上中國本部の全体に亘つて、——但し清兵の陣地を除いて——清朝支配は覆えられていた¹⁰⁾」という。

しかし南京建都の後、天王洪は六十八人の妻妾のほか三百人の女性に侍かれて宮中ふかく籠り、軍政大權はすべて東王楊が之を決して全朝を壓し、五三年十二月には「天父下凡」を假りて天王洪を辱めることさえ行われ、その專政が続くや、「往時の互いに頼り、心を打あけた股肱の同志も、今は……猜忌の心が日に強まり」、五六年九月より十一月にいたる間、所謂「楊・韋之變」(クーデター)をひきおこし、太平天國はここに東王楊秀清・北王韋昌輝・燕王秦日綱(彼はこれより先、五六年八月金壇攻圍のとき陣没すともいわれる)及びその徒黨を失ひ、

北王韋のクーデターについて、李秀成は、「北王殺東王之後、盡將東(王)統下親戚屬員文武大小男婦盡行殺淨。……北王將翼王全家殺了。……北王在朝、不分明白、亂殺文武大小男、勢逼太重、各奔内外、並合朝同心將北王殺之、人心乃定」と述ぶ¹¹⁾。

翼王石達開(將士十餘萬人)を出走せしめることとなり(五七年六月)、茲に太平軍中の老將は居らなくなるし、又これより政事は私門(洪氏族團)に出て綱紀は弛み、軍權また集中せず、まさに瓦解・没落の一步を踏み出した。すなわち李秀成によ

れば、「そのとき各々散意^{かいさんのかきもち}があり、而も心各々敢えて自ら散ぜなかつたのは、清朝の將兵が凡そ廣西人を拿えれば、斬つて赦さずと聞いたからだ」としている⁴⁾。

『李秀成自傳』のうち、「計開天朝之失悞有十」に、「五、悞因東王・北王兩家相殺、此是大悞。六、悞翼王與主不和、君臣疑忌、翼起猜心、將合朝好文武將兵帶去、此悞至大。六、悞主不信外臣、用其長兄仁發・次兄仁達爲輔、此人未有才情、不能保國而悞。七、悞主不問政事」とみゆ。

これより先、五三年一月母の喪に服せる曾國藩（ときに四二歳）に團練事務の辨理の命くだり、湖南湘郷の羅澤南・王蔭の郷男を基礎として、長沙に湘軍十營（三、六〇〇人）を編成した。その際、曾は専ら農村の青壯年に之を求め、自ら筆をとつて郷黨の父老に、その壯丁を送り出すことを勸説し、その統率者には舊軍人を斥け、朱子學者羅の協力を求め、その門人の儒生を用い、官費を以てその訓練にあつた。この湘軍（勇）は、農民革命の立場からすれば、まさに反動的役割をもつて生れたもので、太平軍の勢力が擴大すればするほど、舊來の習俗・禮教の破壊・生産關係の改變がおこり、舊秩序の保持者たちに深刻な不安を與え、

この點については、五四年二月二五日（咸豐四年正月二八日）曾國藩の『討粵匪檄』が明かに語っている。即ち粵匪は「學中國數千年禮義人倫、詩書典則、一旦掃地蕩盡」せしめ、「開闢以來名教之奇變」をやり、亂臣・賊子さへ敬畏した學宮・佛寺・道院を焚き、孔子の牌位・神佛の像を毀滅したからには、「慰孔孟人倫之隱痛」に「爲上下神祇雪被辱之憾^じ」としている。

湘男をはじめ、その後李鴻章（ときに三一歳）が之に倣つて編成した淮軍（勇）らは、これらの支持・支援をえて、ついに太平軍に拮抗しうる迄に強化せられ、五八―九年頃には、兩湖・江西を完全に太平軍から奪回することに成功した。そして六〇年二月、江南軍總統張國樞が江浦九袱州を攻陥し、天京を震駭させるや（第五次包圍）、太平軍の忠王李秀成・英王陳玉成は之を夾撃して、五月初め江南大營を潰滅して天京の包圍網を解くをえた。そして太平軍今後の戰略方針を樹立し、英王陳は安徽の保衛・經營を擔當し、侍王李世賢は福建・浙江を、忠王李は長江下流即ち江南を經略することとなった。李秀成及びその堂弟李世賢の揮いる部隊は、六〇年五月（それは天京奠都から七年目のことである）以來、はじめて所謂東南

財賦の要地江南・兩浙の地を進攻したものの、太平軍全体の形勢は、すでに頹勢の局面におちこんでいた。

さて安徽保衛の基地安慶も、六一年數次にわたる會戰で九月五日ついに失陥し、十一月二十日欽差大臣兼兩江總督曾國藩は、江蘇・安徽・江西三省並びに浙江全省の軍務を統轄することとなり、弟の國荃をして南京を、左宗棠をして浙江を、李鴻章をして蘇・淞を夫々攻略せしめた。これより先、太平軍が淞・滬附近を進攻するや、上海保衛のため、英・佛等の列國軍隊のほか、米人 F. I. Ward (華爾、六一年) の指揮する洋槍隊 (ワードは在華米人からは「海賊上りの掠奪者として蔑視せられた」、米國側の支持をえず、却つて英國提督ホープの絶大な支援を受けた)¹³⁾——その後英人 G. Gordon (戈登、六三年三月就任) の常勝軍にまで發展——が組織されて、共同戦線がはられ、ついに六三年十二月四日江蘇省の據點蘇州が、翌年三月三十一日には浙江省の據點杭州が陥落し、曾國藩の全軍が天京を圍み、六月一日洪秀全の服毒自殺(時に五二歳)、七月十九日太平軍との間に激しい市街戦を展開して、ついに南京は陥落するに至った。而もこのとき、「十萬餘の賊は一人として降る者無く、聚衆は自焚して悔いざるに至っては、實に古今罕に見る劇寇なり」と、曾國藩をして奏上せしめたのである。¹⁴⁾

尤も『忠王自傳別錄』李鴻章手錄問辭及忠王答語には、「城破時、城中不過三萬人。除居民之外、賊兵不過萬餘人。能守城者不過三、四千人」とあるが。

なお其餘黨・康王汪海洋軍は、浙江杭州陥落後、安徽・江西・福建を経て、廣東嘉應州で六六年二月七日滅亡。また侍王李世賢軍は、江蘇溧陽より浙江・安徽・江西・廣東を経て、福建漳州に據つて、六五年五月十五日討滅せられ、翼王石達開軍は、さきに南京を出走してのち、安徽・江西・浙江・福建・湖南・廣西・廣東・湖北・貴州・雲南と轉戦し、四川越嶲(洗馬姑)でついに六三年六月十三日力つきて降つたのである。¹⁵⁾かくして十有六年十七省六百餘城を奪取した太平天國運動も、完全に失敗に歸したのである。

註

①「頒行詔書」『太平天國Ⅰ』

② 簡又文『太平天國首義史』

③ 陳微言「武昌紀事」『太平天國Ⅳ』

- ④ 『洪王李秀成自傳原稿彙證』
- ⑤ モーリス・ヤタンナー『極東國際關係史』上巻
- ⑥ F. L. Hawks Pott, "A Short History of Shanghai," 1928.
- ⑦ 土方定一・橋本八男共譯『上海史』昭和十五年刊
- ⑧ 彭明『中國近代簡史』一九五三年刊
- ⑨ H. B. Morse, The International Relations of the Chinese Empire," 1910 (p.458)
- ⑩ 『太平天國野史』
- ⑪ H. F. Mac Nair, Modern Chinese History Selected Readings, 1923. Chapter IX. The 'Taiping Rebellion.
- ⑫ 郭廷以『太平天國史事日誌』
- ⑬ 『曾文正公文集』卷二
- ⑭ 植田捷雄「太平亂と外國」『國家學會雜誌』第六三卷一・二・三合併號 昭和二十四年三月
- ⑮ 「金陵克復全股悍匪盡數殲滅摺」『曾文正公奏稿』卷二十五

四

一体、太平天國の革命思想は、洪秀全の第一次廣西傳道旅行ののち、その郷里で起筆した傳教書たる『原道救世歌』・『原道醒世訓』・『原道覺世訓』(一八四五—六六年作)などの中に、彼の説く上帝支配の世界觀に基づく政治的・經濟的・社會的平等思想に發した政治社會變革の理論的根據が描き出されている。

また馮雲山との合作にかかる上帝會の各種儀式(洗禮・禮拜・祈禱・讚美歌等)や、モーゼの十誡を模倣した『十款天條』こそは、會衆組織化の重要な手段であり、戦時・平時を通ずる行動規範であつた。而してその運動の指導者たちは、洪秀全・馮雲山の如き失意の讀書人や楊秀清・蕭朝貴の如き遊俠、韋昌輝・石達開・胡以晄らの田紳等々によって形成されたが、

洪を教主とし、馮が上帝會を主持し、楊が運動を領導し、韋・石・胡らが之を支援。

その據つて立つ基本的勢力は、廣西の寒苦零落の窮人たる客家農民・燒炭工(炭黨)・礦工ら約三千の上帝會員がその主体を爲し、金田起義の前後には、洪大全をはじめ羅大綱ら八頭目の會黨の參加(五〇年十一月、尤も羅のほかは翌年一月清軍に投降す)・貴縣客民の來投(五〇年十二月)等々によって、その軍事勢力を増強したが、この太平天國運動が十有餘年に亘つて存

續しえたのは、廣大な下層農民・失業者が不斷に参加し、また之を擁護して來たし、南方の天地會をはじめとして北方の捻黨・白蓮教徒や西北の回民・西南の苗民、更に地方に蜂起した匪徒が響應して、清朝政權に抗爭したからであり、その鬭争は、滿清政治支配に反抗し、また其の據って立つ社會勢力に對立し、また彼らの支持する禮教信仰を覆えし、新しい政治權力を打ち立て、上帝のしるしめす地上の天國を夢みたもので、それはやはり農民戦争と見られるものであった。即ち太平軍は、城市を占領すれば、官僚を殺し、紳商・地主の財産を没入し、衙門・粮冊・田契・借券を燒棄し、以て一般大衆の民族的壓迫や封建的束縛を解除して來たが、かの天京奠都後に頒布した『天朝田畝制度』の中に、その性格を明瞭に表示している。そこには、「凡天下田、天下人同耕……有田同耕、有飯同食、有衣同穿、有錢同使、無處不均勻、無人不飽煖也」を、この制度の建前として、土地國有を實行し―地主的土地所有制の廢除―、その授田は「人口に照し、男婦を論ぜず―男女平等―、其の家口の多寡を算え、……もし一家六人なれば、三人に好田を分ち、三人に醜田を分ち、好・醜各各一半とす」。そして「十六才以上には、尙尙田（一畝につき早晚二季一千二百斤を生ずる田）」「二畝相當額」を分ち、十五歳以下には其の半ばを分ち、その收穫物に對しては、「除足其二十五家、每人所食、可接新穀外、餘則歸國庫。凡麥苧苧麻布帛雞犬各物、及銀錢亦然」として、剩餘生産物は必ず國庫に上納せしめ、「婚娶彌月（出産祝い）等の事あらば、國庫より定額費用を支用支取する」といった等々の自耕農民の基礎の上に、共產的な農村コンミュニオンを組織せんとする多少反動的な要素を帯びていた。

一体、『天朝田畝制度』は、冒頭に一軍のうちに典分田・典刑法・典錢穀・典入・典出の諸官をおき、師帥・旅帥を以て兼攝せしめ、軍帥は軍中の一切の生死黜陟等のことを、上級官を経由して天王に奏し、天王の降旨は、軍帥が遵行すること、功勲ある臣は世々天祿を食み、其の後來歸從した者は家ごとに一人を伍卒とし、警あれば兵とし、無事なれば農とすることを述べ、次いで上引の如き分田規定が出てゐる。そして副業規定とともに、生産物は生活・生産に必要な部分を除いて、國庫に歸すべきこと。さらに二十五家ごとに國庫・禮拜堂を設け、禮俗を助け、傳道・禮拜を行うこと。つづいて農民の力惰の賞罰・各家の争訟の處置方針から保舉の適否によつて官の陞貶をおこなう司法黜陟制度を長々と誌し、それから軍事編成の法を説き、最後に禮拜・服役のことに觸れたもので、幾多の條文が、統一もなく集まっている感のするものである。そして河鱸源治氏がいわれたように、それは「周官的に構想さ

れ、「あらゆるものは、上帝の物であるという專制王朝的な思想を、大同的理想を假りて表現したものである」とも見られよう。²⁾

ところで、極大部分を占めた貧農・佃戸にとって、何よりも大きな魅力であった分田制も、戦争状態の中で、その支配圏は動搖常なく、農村秩序は安定を欠き、分田を實施すべき諸條件は成熟せず、一片の空手形に終ったとはいえ、地主の退避逃亡によって、佃戸たちは納租を免がれ、事實上地主制廢除にひとしき状態を招來していたのである。

一方、太平天國の財政的基礎は、「吾以天下富室爲庫、以天下積穀之家爲倉、隨處可以取給」と豪語した如く、太平軍の通過する城市の官庫・官僚・紳商・富戸からの没入・募捐、換言すれば全く掠奪組織の上に立っていたが、すべて之を聖庫に納め、全軍を賄ひ、貧窮者を救恤しつつ、進軍した。その後、戦況がやや進展すると、城市で佈告を出し、「富者出資、窮者効力」せしめ、貧糧の貢獻は、「限三日齊解聖庫、賞給貢單」、「如有一戸不到、定將全家斬首」云々とし、膽怯者は銀錢・糧米を擔負して、道に絡繹したという。

その初めて武昌を陥れたときも、この佈告を出し、館（進貢公所）を設けて收貢したが、僅か一日實行して、獲るところ殆んど無く、ついに士卒を派して戸ごとに搜刮したが、専ら城市を掠しただけで、いぜん鄉民を擾さなかった。³⁾

ところが、太平軍が南京に駐するに及んで、軍事據點を確保すると共に、その徵發政策も、城市より鄉村へと擴大して來た。即ち催糧の武裝隊は、破壊と收奪とを蒙った城市では獲るところ少く、自然と鄉村に依存、それも水運の便ある地方に之をもとめ、村邑で貧民を慰撫し、郷紳・富戸を襲って糧米・錢貨を没入し、之を聖庫に納めて軍需に供した。³⁾ 彼らは之を「打先鋒」・「打悶棍」と稱した。

モース及びマクネアー兩氏の言葉をかれは、「五三―五九年の間に、湖北・安徽・江西及び江蘇西部を通じて、富豪の動産は盡く掻き集められ、そして太平軍の見落としたものは、清兵によって奪い去られた」と。⁵⁾

併しながら、かかる收貢・没入のやり口にも、自ら一定の限度があり、

『賊情彙纂』卷十 賊糧科派によれば、「任賊虜刻、此壬子（一八五二年）・癸丑（五三年）冬春情形」とす。

かくて農民側から、自主的に「村鎮ごとに各々若干の耆老を擧げて一公所を設け、太平軍が來れば、耆老がその間を周旋

し、貧苦を述べて錢數百千、糧數百石を輸納して、彼らの搜索を免がれ、彼らが去つて後、「田畝に按じて之を還する科派の法が生じ、而も太平軍の占據が繼續するところでは、郷官を擧げ、戸冊を造り、門牌を給する鄉村機構を整え、

舉官造冊・給發門牌のことは、「殿右捌指揮楊札諭」にみられるところ、その鄉村機構の再編成については、軍隊編成の例に仿つて、江蘇の昭文・常熟縣で六〇年十一月二日（舊九月二十日）に實施した事例が、顧汝鈺の『海虞賊亂志』、『太平天國』に下の如く見ゆ。『九月二十日。……乃以昭文地界分前・後・中・左四營、常熟地界分前・後・中・右四營。每營一軍帥、五師帥、二十五旅帥、一百二十五卒長、六百二十五兩司馬、三千一百二十五伍長。軍帥請當地有聲價者充當。師帥以書役及土豪充當。旅帥・卒長以地保正身夥計分當。惟兩司馬・伍長硬派地着中股實者承值。凡有役賦不完結者、都責任他身上。出偽示、着旅帥卒長按田造花名冊、以實種作准。業戶不得掛名收租。各分疆界、起房捐・店捐。開張者領店憑。有船者領船憑。水陸要路立卡收稅。封欒樹宅樹充公。用各手藝當差。居民留髮。如有田項違示者、定按軍令。實現年漕米、補完現年下忙銀兩、限到年一併清割。この點については、「賊情彙纂」卷十賊糧・擄刻にも、擄刻ののち、「安民之令」を下し、一州・一邑に老賊（廣西老兄弟）を選んで監軍〔守土官〕一人を置き、……軍・師・旅・卒・兩・伍に分ち、田畝多き者を脅かして偽官〔郷官〕に充て、貧戸を以て伍卒に充つ」とみゆ。

そして郷官をして民事と徵糧のこと等を擔當せしめ、後者については、舊規に依照して稅糧を徵收することとなった。

河簪源治氏の昭和二十八年秋の史學會大會における報告「太平天國郷官創置年代考」によれば、郷官は五三年秋から翌春にかけて安徽・江西の沿江州縣に創置されたもので、それは『天朝田畝制度』の構想にもとづいて置かれたが、分田を實行するに至らず、米糧の緊急確保のため、舊に照して徵糧することになったと推せられるところ、『依照舊規徵糧』については、沈懋良の『江南春夢庵筆記』によれば、「偽定田賦の制は、男子十六才以上五十才以下を以て丁と爲し、每丁耕田十畝、賦三石六斗六升、錢三百六十六文を納む」とあり、また趙沛濤の光緒『剡源郷志』卷二十四には、太平軍の范汝增部隊が奉化を占領して、郷官を置き、「各村から進貢せしむ。門牌を編立し、一牌に番洋三圓五角（原註：時の番洋は毎元が錢一千八百文）を出させた。未だ幾くならずして、田冊を開造せしめ、五畝以上を以て計算し、米二斗を納めしむ」（五畝以下のものは免徵す）とみえ、吳文江の光緒『忠義郷志』卷十六にも、之と同様の記載が見ゆ（兩郷とも浙江省奉化縣に屬する）。因みに上記門牌捐については、各地一ならず、浙江の蘭谿では四元、浦江では錢三千文、長興では五百文から二千文。諸縣が一元、奉化が三元五角、寧波では洋一元五角、錢百文、居民の貧富を視て定められたようである。

而してかかる機構が出来ると、搶劫者があれば、郷官より訴え出れば、直ちに之を捕えて斬首せられ、かくて「民情甚

だ安んず」ることとなり、「行軍の需するところ」「の各物は、皆之を郷官より取給し」、或いは鉄鋤千柄、或いは蓆千張、或いは划船百隻、公文一下、咄嗟立ちどころに辨ず」るようになったといふ⁸⁾。

更に交通の要衝には、卡關を設け、船に對しては船の長さ一丈に對し一千錢、船賃は粗貨に對しては船長一丈につき二千錢、細貨に對してはその倍額を徴し、之に對し「船票」を給したが、その税額は多くなく、九江の關權税は月數千錢に過ぎなかつたとせらる(また翼王石達開が安慶の大星橋で權關を設け、江上を行く舟から税を徴したことが見ゆ)⁹⁾併しながら、太平軍が没入した百貨で不必要・過多のものは、皆村鎮に屯集して、廉價で以て郷民と錢あるいは米・豆と交易し、天京の聖庫に送つた。

百貨の中では、とりわけ淮塩と湖北の布棉が大宗をなし、江淮の塩を興國・蕪・黃へ搬んで民間に賣り、湖北の布疋・棉花を安徽・江南の百姓に賣つたと云う。そして天京に送られた穀米は、聖糧館(復成・虎賁・豐備・添儲等の倉)に囤積せられ、金銀(珠寶・參茸・錢鈔・衣服)等は、之を聖庫館に貯藏し、そこより江寧の官卒に口糧として、また禮拜錢・買菜錢として發給されたものである。即ち太平軍では、上は天王より下は士卒にいたるまで、糧食が配給せられ、天王は日に肉十斤、以下總制の半斤、禮拜日ごとに禮拜錢・糧米油塩及び御供物を受取つたのである。即ち二十五人を管轄する兩司馬は、毎七日錢一百文、散卒は五十文の禮拜錢を給せられ、また二十五人ごとに米二百斤、油・塩各七斤を聖庫より給せられ、外に上官より買菜錢が與えられ、豚・雞等を買つて衆兵の聚餐に供した。その他衣服・器物等一切の生活費は、すべて公家から供給せられ、それは朝内官に對しても同様であつた。また南京城内に收容した男館、女館の衆たちにも給養したのであるから、天京の包圍や徵糧成績も大きく關係し、『太平天國野史』卷之一 天王の條には、「太平三年(一八五三)時天京久困圍師、糧不繼、天王命揀男婦之老弱者、伴令城外刈麥(稻のあやまり?)、既出而閉之、以減軍食」と見ゆ。

右については、謝介鶴の『金陵癸甲紀事略』に、咸豐三年(1853)末及び同四年閏七月二十七日、婦女を郷圩にやつて割稻させたこと、その際逃散者が無數に出たことを報じている。

註

- ① 『太平天國』に輯む。
- ② 河鱸源治「天朝田畝制度からの成立について」『東洋學報』第三十三卷第二號 昭和二十五年十二月
- ③ 張德堅編『賊情彙纂』
- ④ 「天命詔旨書」『太平天國』
- ⑤ モース・マクネアー『極東國際關係史』上卷
- ⑥ 北京大學文科研究所・北京圖書館編輯『太平天國史料』（一九五〇年刊）第二部分太平天國文書 一般文書中に輯む。
- ⑦ 『太平天國Ⅳ』
- ⑧ 郭廷以『太平天國史事日誌』下冊
- ⑨ 凌善清編『太平天國野史』
- ⑩ 蘇浮道人『金陵雜記』『太平天國Ⅳ』

五

なお最後に列國の動向を顧れば、太平軍が南京を占領するや、英國は五三年四月末、香港總督 Sir George Bonham〔文翰〕を特使として天京に派遣し、東王楊に對して、英國は既定方針として我が臣民と通商關係をもつ國の内争に干渉せず、中立を守ることがを、書面を以て達している。併しその節も、「英國は既に條約によつて五港の通商權をもつ。従つて……我國臣民の生命・財産を犯す場合には、十年前、英國が鎮江・南京及びその附近の城市を占領し、南京條約を締結せしめたと同様な手段を直ちに採ることに躊躇しない」と答えている。¹⁾

一方、太平天國側では、英使の來朝を以て忠誠の表徴と見做し、

東王楊のボナム特使に致した書中に、「爾遠人願藩屬、天王歡榮」とみえる²⁾、米使 Robert Mc Lane〔麥蓮〕に宛てたものにも「爾の忠誠を嘉みし、年々貢物を齎すことを認めん」と誌されている³⁾。

そのおもしろいあがつた狂信者の態度、近代國家觀・外國勢力に對する「近代國際關係方式に關する」理解の薄さを示しているものの、毒物アヘンの搬來に對しては、如何なる妥協も示さなかつた毅然たる態度は、注目すべきことであろう。

『太平天國野史』卷之二十 太平朝之外交に、「彼此通商、理所當然。將來事定、惟有洋烟勿再來華、其餘貿易無禁」と。即ち左表の數字は、太平軍が生糸・茶葉の重要生産地域を抑え乍ら、何ら商業貿易を控制せなかつた事實を物語っている。

太平天國時代の生糸・茶葉輸出狀況表⁴⁾

年次	生糸	茶葉	備考
一八五二年	二五、五七一 包	七二、九〇〇 ^{千磅}	太平軍武漢占領
一八五三年		七七、二一〇	南京定都
一八五四年		八六、五〇〇	兩湖失陷
一八六〇年		八七、二二一	蘇州占領
一八六一年		一〇七、三五二	
一八六二年	八八、七五四	一一八、六九二	蘇州失陷
一八六三年	八三、二六四	一一九、六六九	南京失陷
一八六四年	四六、八六三	一二一、二三七	
	四一、一二八		

かくて天京視察の結果、ボナムの到達した結論は、清朝政府に代りうる事實上の政府は、未だ樹立されたとはいえず、英國政府の採るべき眞の政策は、兩交戰軍のいずれにも味方せず、嚴正中立を守り、英國の利益が直接侵害された場合、必要に應じて直接之を防衛することであるというに あつた。

ところが、此の大亂の最中、第二アヘン戰爭がおこり(1857—58)、英・佛兩國は清廷との間に『天津條約』(1858)・『北京條約』(1860)を締結して、中國國土内に絶大な諸利權をうると共に、英國の對中國輸出品の大宗たるアヘンの公然たる輸入許可(アヘン課税—一ピクル三〇兩の輸入税による合法的輸入)を得、長江における英國船貿易權、揚子江航行權が認められたのである。

即ち一八六一年初、英・米兩國は條約にもとづき、漢口・九江に商埠を開き、そのためにも、長江流域における太平軍の勢力を掃除する必要がおこつた。かくて列強の軍事上清朝政權との合作は、ここに正式の明確な政策となる。

即ち中國への印度アヘンの輸入は、一八四〇—一年の一七、八三九箱より四五—六年の三四、〇三五箱、五〇—一年の

四八、〇三〇箱、五五十六年の六三、四二七箱と急激に増大するし、且つ五〇年以後となれば、従前の廣東貿易の優越性が上海にその地位を譲ることとなり、

H. B. Morse, "The International Relations of the Chinese Empire" 1910 (p. 366) の一八四三—一八六〇年における茶葉及び絹の輸出表をみれば、茶葉では五二年、絹では四六年以來、上海が廣東を追越してしまつた。

また四一—五七年の廣東排英運動もあつて、英國資本主義の上海を根據として長江流域への商權擴充の要請に答えた揚子江航行權の獲得にまでこぎつけた。これこそ、清廷が英國に揚子江航行料として太平天國運動の鎮壓を求めたところでもあり、六〇年八月の太平軍の上海攻撃、さらには六二年一月の第二次攻撃を契機として、かつての中立・不干渉態度を完全に放棄して、清廷を援けて、太平天國を攻撃する舉に出でたのである。

モース及びマクネア兩氏によれば、Bruce [ト魯斯] 及び M. de Bourboulon [布爾布隆] 兩氏は、六〇年八月、太平軍に書面を送つて、上海港は北進部隊の中間基地として使用中につき、純然たる軍事上の措置として、上海を防衛する旨通告。八月二十一日英佛連合軍が華北において太沽砲台を攻略した。その日、上海における連合軍は、清朝の敵を撃退したのである。而も六二年四月十日、英公使 Sir F. Bruce の外相 Earl Russell に送つた書には、「もし英國人が在華利益を犠牲にすることを願わねば、自衛のために早晚太平軍と衝突するであらう。嚴重な紛糾を避けんがためには、ただ現になお中國の四分の三を控有する北京政府を維持すべきである。もし太平軍が英國商務を侵害すれば、まさに即時に致命的打撃をあたうべきである」とし、之に對し同年七月七日ラッセルがブルースに與えた訓令によれば、「その太平軍に對する政策に賛同し、英國人商務および口岸を保護し、ならびに中國政府に勸めて軍隊を改良すべし」としている。なお卿汝楫氏は「H. Cachill, "A Yankee Adventure," New York, 1932 を引いて、一八五〇年以後になると、報紙の態度は一變し、いずれもの文章が、太平軍を咒罵し、彼らは野蠻人で、中國の最も富庶な省を毀損したとし、胡繩氏もまた諸家の説をひいて、この年を以て列強の態度の改變期としている。」

さらに六三年一月九日には、英國國王は、「凡そ英國軍官は均しく中國政府にあつて、軍職を擔任することを得」との命を下したのであつて、これこそ英國の太平軍に對する宣戰布告に等しいものであつた。即ち Ward の洋槍隊は、この時すでに充分の訓練を経、更に Gordon 少佐の常勝軍が之に代り、英佛連合軍と共に共同戰線をはつて太平軍にあたり、忠王李をして、「洋鬼燬火利害、百發百中、攻倒城牆、我官軍不能立脚」と語らしめたのである。尤も英佛連合軍の活動

は、上海を中心として三十哩（一〇〇支里）以内の地域よりの太平軍の掃蕩にあって、江蘇全省の恢復は、常勝軍や李鴻章の活躍に俟ったものであった。とはいえ、海口を目ざした太平軍の望みを粉碎すると共に、その後の反革命軍の作戦を有利に導いたことは、充分に評價せなければならぬ。

一方、開市場寧波は、六一年十二月九日太平軍（李世賢部隊）によって占領されたが、「彼らはべつに外國人の權益に干渉しようと試みず、……局外中立を聲明していた外國租界は、何らの侵害も蒙らなかつた。」⁵⁾

このため、上海租界の場合と同様、寧波城から狭い川を隔てて設定されていた租界に、約七万の避難民が來住して、俄かにその發展を見るにいたつた。⁵⁾

然るに翌六二年五月清軍が寧波奪還に來たるや、同月八日英海軍 Roderick Dew 大佐及び佛海軍 Kenny 大尉が太平軍に和平退出を勧告したが、その拒絶にあうや、十日清軍を援助して、城内の太平軍を驅逐した。そればかりか、常勝軍及び清佛混成軍によって、のちには左宗棠の軍と協力して、南浙江の掃蕩をおこなつたのである。

因みにこの清佛混成軍は、佛海軍 A. E. Le Brethon de Caligny [勒伯勒東] および寧波海關稅務司 Prosper Giquel [日意格] によつて編成された二、五〇〇名の軍隊である。⁶⁾

而もその間にあって、太平軍の將領は國際外交において稀にみる堂々たる態度を示すと共に、戦闘にこそ破れたとはいへ、敵の作戰總司令 Sir James Hope 提督 [何伯] を傷つけ、Auguste Léopold Protet 提督 [ト羅德] を陣沒せしめ、さらに同治帝より絶讃された洋槍隊（常勝軍）の F. T. Ward 將軍、また寧波における佛軍指揮官 Kenney 大尉、E. Le Brethon 艦長、Tardif de Moirey 大尉等々を戦死せしめ、英・佛に對し高價な犠牲を支拂わしめた。ただ一つ、天京陥落ののち、移動をつづけ福建省漳州に據つた侍王李世賢が、六四年十一月十三日（太平天國十四年十月一日）英・佛・米各國全權公使及び其の人民に致した書に、太平天國の主張を申述して、かれらの援助を乞ひ、「其能統率海軍與我聯合、則土地・財物及一切戰利品、當平分之」¹⁰⁾といった末期的言辭を弄したことは、一大汚點とみられるものであらう。

之を要するに、太平天國は十有餘年に亘つて、人民政權を華中で樹立していたが、時の経過とともに、上層部の内訌・腐化で新中國建設の擔い手たる地位から脱落した譯であるが、此の運動には、腐敗した清朝官僚機構の打倒、

尤も太平天國は、之に代る支配機構を創出する能力なく、天王洪は皇帝化の途を一步一步築いて來たし、職官制を定めて彼を中心とした階層を整え、さらに科擧の制を開くなど、増井教授の言葉をかれは、「中國人の骨にまでからんだ官人尊重は、あれほどの反官僚主義を、この科擧の一角から蝕」み、「官人支配の權威は、そのまま太平天國の權威であつた」¹¹⁾のたが。

漢民族の獨立解放、土地の平分、男女の平等、

G. E. Taylor 氏は、「太平天國において婦人に與えられた新しい地位は、ひとしく國民の眼に革命的なものであつた」¹²⁾と述べている。それは、女官・女軍の官制や科擧の門を婦人に開いたこと等に、具體的にあらわれている。

纏足の禁止、

曾國藩の『討粵匪檄』に、「婦女にして脚を解くを肯んじない者は、立ちどころに其の足を斬つて以て家に示す」と、婦女子の太平軍に對する憎惡・恐怖を誘發させる言辭を弄しているし、『盾鼻隨聞錄』卷五 撫言紀略には、賊は女館の婦女をして悉く脚纏を去らしめ、夜間女百長「廣西婆」が逐一查看し、未だ脚纏を去らざるものあれば、輕きは責打し、重きは脚を斬るとす。また『太平天國野史』卷之二十 禁纏足にも、太平軍が初めて江寧にいたるや、即ち令を傳えて纏足を准さず、違う者は斬首とし、すでに纏足している者は、足の束縛をとらせ、「はだしであるかせ」謝介鶴『金陵癸甲撫談補』¹³⁾、挑ったり擡げさせたりして之を困しむとある。而もこの文の冒頭には、「軍中にあるのは、皆粵西溪桐村の嫗で、赤足健歩、男子と異なるなし」とみえ、客家の女の「天足」からすれば、纏足はまさに中國婦人の奴隸的地位の象徵でもあつた。

娼妓の禁絶、

『賊情彙纂』卷七 僞文告上「韋・石兩逆告示式」に、「一、娼妓最宜禁絶也。……倘有習於邪行、官兵・民人私行宿娼、不遵條規當娼者、合家剿洗、鄰佑擒送者有賞、知情故縱者一体治罪、明知故犯者斬首不留」とみゆ。

奴隸制の廢止、

ここに洪仁玕の『資政新篇』（太平天國己未九年「58」刊¹⁴）をもち出すのは、一寸氣になるが、「一禁溺子女、不得已難養者、准無子之人、抱爲己子、不得作奴視之」、「准富者、請人傭工、不得買奴」とあり、その上欄に「欽定此策」是と出ている。吸洋烟の嚴禁等、當時の人民大衆の冀求するところを、採取している。

いま土地平分思想を、再び例にとれば、それには『周禮』的なよそほいがあり、當時の華中農村經濟の發展段階を無視したものをとつとはいえ、その中に左翼史家の表現をかれは、地主の土地沒收・封建勢力の肅清といったテーゼが潜み、客觀的にみれば、來るべき資本主義への發展の要求でもあったと。もとより太平天國運動は、ブルジョア階級の民主革命ではなく、基本的にみて、なお農民戰爭であつた。しかも華中南の龐大な大衆の參加・協力をえたばかりか、從來の農民戰爭にくらべて明確な主張をもち、嚴格な組織と規律を有し、さらに進歩的な諸政策を把持して、清朝專制政權とその據つて立つ社會的勢力とその社會的・文化的・經濟的基礎を變革せんと試みたのである。

なお茲に一八五九年以來、太平天國の朝政を總理した干王洪仁玕―彼は西洋文明に深い關心をもつた太平天國隨一の新人である―の天王洪に上奏した『資政新篇』¹⁵に注目せねばならぬ。そこでは、世界各國の情勢を説き、興車馬之利・興舟楫之利・興銀行・興器血技藝・興寶藏・興郵亭等々の諸獻策の中に、近代資本主義の路線を顯示してはいるが、天王洪より「欽定此策殺絕妖魔行未遲」と硃批せられ、ついに實施のはこびにいたらなかったことは、『李秀成自傳』¹⁶にも、天王が「見其弟〔仁玕〕至格外歡喜、到京未滿半月、封爲軍師、號爲干王、降詔天下、要人悉歸其制。封過後、未見一謀」とあることから、知られる。事實、この書は、土地制度について一言も觸れていず、その時務改良主義の思想は、太平天國の革命政綱を骨抜きにしたものであつた。¹⁵

すなわち、太平天國は、すでにアヘン戰爭を経験したのちに生れたが、増井教授もいわれるように、「近代産業と啓蒙思想との兩翼をもたない、生一本の農民運動」で、社會的には「封建制の切り崩し役をつとめた」¹⁷ところに、この運動の社會的意味をみておきたい。

註

昭和九年十月

① 鈴江言一「太平天國と外國關係」『滿鐵調査月報』四の二〇

② 謝興堯『太平天國史事論叢』（民國二四年刊）「太平天國國體

關係史略」に引く李圭『金陵兵事彙略』

- ③ K. S. Latourette, "A History of Christian Missions in China," 1932. Chap. XVI. The T'ai Ping Rebellion, p. 293

- ④ 卿汝楫『美國侵華史』第一卷 一九五二年刊
 ⑤ モース及びマクネアー『極東國際關係史』上卷
 ⑥ 郭廷以『太平天國史事日誌』
 ⑦ 胡繩『帝國主義與中國』一九五二年刊 (二三頁)
 ⑧ 羅爾綱『忠王李秀成自傳原稿箋證』
 ⑨ 植田捷雄『支那に於ける租界の研究』昭和十六年刊
 ⑩ 凌善清編『太平天國野史』卷之二十 載餘 侍王答各領事書
 ⑪ 增井經夫『太平天國』
 ⑫ G. E. Taylor, "The Taiping Rebellion: Its economic background and social theory."

- ⑬ 中國史學會主編『太平天國Ⅳ』
 ⑭ 北京大學文科研究所・北京圖書館編輯『太平天國史料』
 ⑮ 野原四郎『太平天國にかんする中國での論争』『歴史學研究』第一六三號一九五三年

本稿は(1)前夜、(2)運動、(3)影響の三篇より成るが、ここには(2)運動の部分のみを載せた。

東洋史研究會 編 中國隨筆索引

A 5判・約一〇一〇頁・定價一〇〇〇圓

事物紀原・輟耕錄・湧幢小品・七修類彙・日知錄その他、唐から民國に至る隨筆一六〇種餘りの記載事項約七萬を集録、五十音順に排列したもの。

中國史のみならず、日本史・西洋史關係の研究にたいしても重要な資料を提供するものであり、研究の便宜に資すること多大であります。

當會で、購入の斡旋を致しますから、至急御申込み下さい。

なお、項目を増訂したため、頁数が豫定を大幅に超過して増加しました。そのため右記の通り、値段を引上げざるをえなくなりました。宜しく御了承下さい。

既刊

東洋史研究室 編

通制條格・憲台通紀目次索引

(油印本)

B 5判・七八頁・頒價一〇〇圓(送料共)

右の各書、御入用の方は、本會宛御申込下さい。

東洋史研究會

The Taiping Rebellion

Motonosuke Amano

The Taping Rebellion was not a democratic revolution of bourgeoisie but an agrarian rebellion in its fundamental nature. The masses of Central and South China participated in and supported it. It had a clearer principle, more rigorous organization and discipline than the former agrarian rebellions had had, moreover, it attempted to change the despotism of the Ch'ing and its social foundation by its progressive administration. It intended to reform the conditions of production and opened the way to the coming capitalism, and here lies the histolical importance of this Rebellion. The present auther relates the story of the Refrom from its beginning to its end together with its organization—the role of the Shang-ti-hui, hierarchy and military organization, the progressiveness and limit of its administration and its foreign relations.